

校歌制定時の秘話③【創立 70 周年記念誌より】

井上佳先生を偲んで

松田 忠昭（創立七十周年当時在籍教諭）

昭和二十年年代の後半には、若い先生方がつぎつぎと赴任され、本校に新風が吹き込まれた。生徒会が組織的・機能的に運営され、コーラス・演劇・放送・野球など、今でいう部活動が盛んになったのはこの頃だった。ことに音楽教育はめざましい進歩を遂げ、私達は充実した毎日を過ごしたものである。そのことを思い出すにつけ忘れることができないのは、昭和二十六年から三十年まで本校におられた井上佳先生のことである。音楽の指導を通してお示しくださった、ものごとに対する考え方や、取り組み方は、現在の私にとって、大きなころのささえとなっている。

一、佳先生

「さあ、やろう。」

これが初めての授業における先生の第一声だった。口の前の方でしゃべる感じだが、深みのある若々しい声だ。何となくせかせかした歩き方で足音は軽い。何を教える時でも、「さあ、やろう。」で始まる。

佳先生の話を聞いていると、いつのまにかその気になってしまう。本当に不思議な力を持っていた。腹・胸・喉・顔・はては口の中まで先生の体を丹念にさわらせて、腹式呼吸、口の形、声の響かせ方、唇と舌の使い方などについて、こまかく教えてくださる。

「場所によってさわり方を工夫せんといかん。」と言いながら、手の持っていきかたや動かし方にまで心を配る先生のさわらせ方は、実にうまいものだった。後になって聞いたのだが、その頃先生は目をつぶって、できるだけいろいろな物に触れてみたし、進んで全盲生の手引きをして、あちらこちら歩きまわったそうである。

四月中頃だった。

「合唱団を作って高校の音楽会にしようや。」そう言った佳先生は、その日のうちに人集めをして練習にとりかかった。

「先生も一緒に歌わんかな。学生服を着たらわからせんぞな。」と、赴任したての菅先生を誘って、ソロのパートを歌って貰った。練習は厳しかった。

「暗い声を出すな。」「姿勢が悪い。」「口を開けんか。」そしてあげくの果てに、「僕の言うことが聞けんのなら止めてしまえ。」と怒鳴られる。それでも誰一人止めていく者はいなかった。厳しい練習も魅力だったが、練習が終わるととても優しくてこだわりのない佳先生が、

みんなは好きだったのである。

そして、七月には教育会館で「羽衣」と「峠の我家」を高校生に交って歌うことができた。初めての経験ですごく感動したのを今でも覚えている。

二、巡回授業

その頃、井上校長の一家は、校内の住宅に住んでおられた。私は数人の友達と一緒によくお邪魔して、先生方といろいろなことについて話し合い、大変いい勉強をさせていただいた。

そんなある日、「僕たちのコーラスや演劇をどこかの中学や高校で発表させてほしい。」と話をもちだした。佳先生は、「おお、それはええことじゃ。おとうさんやらんかね。」といて、井上校長に話を向けた。その後まもなく「巡回授業」という形で学校で計画することになり、さっそく準備にとりかかった。コーラス、演劇「勸進帳」、独唱、独奏（ピアノ）、点字の読み書きや、そろばんの紹介などが主な内容、総勢四十名あまりが一週間をかけて、平野、上須戒、三善、菅田の四ヶ所をまわった。宿泊や食事の世話は地元婦人会の方々。当時は交通の便が悪かったので、生徒の移動にはトラックが使用された。日頃練習してきた成果の発表、他校の生徒との交流。盲教育に対する理解と関心を深めることなど、所期の目的を十分達することができ、私達にとっては本当にすばらしい経験だった。

三、校内放送設備の完成（昭和二十六年一月）

教室にも廊下にも寄宿舍にも運動場にもスピーカーが取り付けられ、どこにいても放送が聞こえてくるという。最初にマイクの前に立ったのは井上校長だった。

「皆さん、私の声のする方を向いてください。」校長の声は正面からではなく右手の方から聞こえてきたので、みんな一斉に向きを変えた。運動場のスピーカーは東側にとりつけられていたのである。校長はあわててマイクを離れ、元通りに向きを変えさせた。初めて放送機を使ったときのできごとだった。その日の放課後、私達は放送室へ行って先生から機械の取り扱いについて説明を聞き、その場で放送部を発足させた。私達が流した放送番組で印象に残っているものに、佳先生脚色の音楽物語「アンダンテ・カンタービレ」がある。以来放送部のめざましい活動が始まることになるのである。受持の先生から、「放送よりも勉強だ。」と放送部をやめるようにいわれたある後輩は、「勉強よりも放送がやりたい。」と言って泣いたとか。

四、音楽科の設置（昭和二十八年）

「新職業の開拓は音楽から」と、佳先生は本科音楽科の設置に力を注がれ、ついにそれが稔った。しかし、残念なことにそれは昭和四十八年に廃止されたのだが、その間、何人かの

卒業生を送り出し、現在それぞれ活躍している。

五、全日本盲学生音楽コンクールにコーラス部参加（昭和二十八年十一月）

夏休みにコーラス部約三十人が、十日近く学校で合宿をすると聞かされただけでも、大変な驚きだったが、更に大阪で開かれるコンクールに参加すると聞かされて、二度びっくり。東京から帰省していた私は勉強を兼ねて合宿の手伝いをさせていただいた。残念ながらコンディションが悪くて、入賞は逸したがその時参加した人達は今でもその時のことが忘れられないようだ。赤字覚悟の参加だったので、佳先生と岩田先生はその後、穴うめのため喜多郡とその周辺を廻って映画界を開いたという。生徒のためとはいえ、随分思い切ったことをしたものだ。やはり佳先生でなければやらないことであろう。

六、吹奏楽部の誕生（昭和二十八年）

十五本の管楽器と打楽器が購入され、小編成のバンドが誕生した。そして、愛媛県で開かれた国体の開閉会式のバンドのメンバーの一員として、コーラス部も共に演奏させたというのだから、さすが佳先生である。吹奏楽部はその当時一般の学校でもそれ程盛んではなかったのに、よくもこれだけの楽器を揃えることができたものだ。佳先生はまさしく本校吹奏楽部の産みの親なのである。

昭和五十一年の十一月、五十歳という若さで佳先生はこの世を去られた。本当に惜しい方を失ったものである。盲人の世界へとけこもうとしながら、生徒達の目と心を外へ外へと向けさせた優しさと逞しさと教育に対する情熱は、佳先生がその時、その時を精一杯生きておられたことの証なのである。

井上校長の詞に作曲されたわが母校のすばらしい校歌を、声高らかに歌い続けるとともに、佳先生の深い教えと情熱を、これからの若い世代に伝えていきたいものである。